

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00918

研究課題名（和文）東欧のファシズムの比較史 戦間期権威主義体制の「新しさ」をめぐってー

研究課題名（英文）Comparative history of fascisms in Eastern Europe

研究代表者

姉川 雄大（Angeawa, Yudai）

長崎大学・多文化社会学部・准教授

研究者番号：00554304

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は戦間期東欧のナショナリズムと権威主義政治を、特にそのファシズムとの関係に着目することにより、単なる「反動」という「古さ」ではなく、この時代のヨーロッパや東欧社会の抱えた政治・社会問題に対応していこうとした「新しさ」において捉え直そうとする共同・比較研究である。その際、独伊を模倣した運動・団体ではなく、ファシズムの定義から逸脱する（あるいはその周辺にある）と考えられてきた東欧の権威主義体制・右翼集団などに注目する。自国社会の諸問題への対応を強く要請されていた彼らが、それら諸問題をどのように捉え、そのことが彼らのファシズムとの関係をどのように形成したのかを明らかにするためである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は近現代、特に戦間期ヨーロッパの民主政治、権威主義政治、ファシズム等の歴史学的な理解を新たにし、これを充実させようとするものである。なかでも、これまでファシズムの運動・体制に関して、独伊のそれと比べて周辺のものとしてしか関心を寄せられていなかった東欧小国諸国におけるファシズムや権威主義政治の解明は、独伊をはじめ西欧を含む戦間期・近現代ヨーロッパ史における非自由主義的政治の理解において決定的に重要であるにもかかわらず、十分に行われているとは言えない。本研究はいくつかの個別の対象を手掛かりに、この主題に取り組むものである。

研究成果の概要（英文）：This is a comparative study that aims to reinterpret interwar Eastern European nationalism and authoritarian politics, focusing in particular on their relationship with fascism, not simply as "reactionary" or "old," but as "new" that attempted to respond to the political and social problems that European and Eastern European societies faced during that period. In doing so, we will focus not on movements and groups that imitated Nazi Germany and Fascist Italy, but on authoritarian regimes and right-wing groups in Eastern Europe that have been considered to deviate from the definition of fascism (or are on its fringes). The aim is to clarify how those who were strongly required to respond to the various problems in their own societies perceived these problems and how this shaped their relationship with fascism.

研究分野：歴史学（西洋近現代史）

キーワード：ファシズム 東欧 ナショナリズム 権威主義 リトアニア ユーゴスラヴィア ハンガリー

1. 研究開始当初の背景

第一次世界大戦後のヴェルサイユ体制において、東欧には西欧的な自由民主体制と国民国家の原則が適用された。しかし東欧諸国には西欧的自由民主主義は(チェコスロヴァキアを例外として)根付かず、この地域は「民主体制の崩壊」と、「小独裁者たち」(A・ポロンスキ『小独裁者たち 両大戦間期の東欧における民主主義体制の崩壊』法政大学出版局、1993年)による権威主義体制の支配という特徴を持つに至り、最終的にはその多くが枢軸国陣営に参入することになった。このことは、西欧型自由民主主義への反発あるいはそれが未成熟に留まった結果と理解され易い。しかし近年の東欧近代史研究では、このような近代化の「遅れ」や「逸脱」という単線的発展段階論的な見方ではなく、19世紀の東欧も西欧とも共通した近代ヨーロッパ社会の文脈で研究されている。それでは、戦間期東欧の権威主義をどのように後進性・逸脱という議論ではなく、20世紀史としての同時代性(新しさ)を含めて理解・記述することができるのか。これが本研究開始当初の大枠での問題意識である。

これらに対して、戦間期東欧諸国のかかえた問題を、後進性ゆえではなく、むしろ西欧を含むヨーロッパの同時代的な問題が共有された状況としてとらえ直す試みは、例えば特に社会政策や医療の「発展」や「科学性」と人種主義や反ユダヤ主義の関係に関する研究として始められている(先駆例は C. Promitzer, et al. eds., *Health, Hygiene and Eugenics in Southeastern Europe to 1945*, CEU Press, 2011)。また、ハプスブルク帝国史研究等により19世紀東欧における近代性・ヨーロッパ性や、その表出としての同地域におけるナショナリズムといった要素についても検討されるようになってきた(最新かつ代表的なものとして、P. M. Judson, *The Habsburg Empire*, Belknap, 2017)。しかし、これら諸要素の相互関連や、さらに戦間期東欧新興諸国民国家の権威主義政治との関連については、課題として残されている。

この観点からは、ファシズムとの関係をどう考えるかも重要である。民主体制の崩壊や枢軸陣営への参入だけでなく、逆にファシズムの未達成についても、ある種の後進性として理解されているからである。戦間期東欧諸国の体制はファシズムとは区別される権威主義体制であり、1930年代にファシズム・国民社会主義の団体・政党が出現したものの、ナチの侵攻を受けて傀儡政権が成立するまでは体制化することはなかった。多くの比較史的研究では、これはファシズムの基盤となる都市中間市民層による大衆社会の不在や「未発達」のため、伝統的な農村社会に基盤を持つ従来型の保守主義によって抑えられていたからだ、と考えられてきた。つまり戦間期東欧諸国の権威主義体制については、西欧的自由主義の未発達という議論とほぼ同様に、ファシズムとの違いについてもその基盤の未発達という単線的段階論的な説明がなされてきたと言える。

ファシズム研究の観点では、比較ファシズム研究の分野において、大戦間期東欧の権威主義体制または右翼急進主義勢力の政治的性格を独伊のファシズムに「準じた」存在と位置付けることが常であった(たとえば、S. Payne, *A History of Fascism, 1914-1945*, University of Wisconsin Press, 1996; R. バクストン『ファシズムの解剖学』桜井書店、2009年)。先述の言葉でいう、単線的発展段階論的な見方と言える。しかし現在のファシズム研究においては、「ファシズムの一般的な定義」からの「逸脱」を論じるのではなく「ファシズムとも権威主義とも保守主義とも明確に定義しがたい流動的な状況」の実態を明らかにすることが求められている(小野寺拓也「ナチズム研究の現在(4)ファシスト・インターナショナル：グローバル・ヒストリーとしてのファシズム(1)」『みすず』61(5), 2019)。本申請研究は、第一にこの問題提起に対する応答である。

一方近年では、戦間期の欧州全体でファシズム的な政治戦術(反共主義、指導者原理、大衆動員に向けたシンボル操作など)が国家横断的に相互学習されていた経緯の研究が進められており、このようないわばグローバルファシズム研究は、潜在的には欧州を越えたグローバルな模倣・翻訳・伝播を視野に入れている(たとえば Arnd Bauerkämper and Grzegorz Rossoliński-Liebe eds., *Fascism without Borders: Transnational Connections and Cooperation between Movements and Regimes in Europe from 1918 to 1945*, Berghahn Books, 2017; Reto Hofmann and Daniel Hedinger, Editorial - Axis empires: towards a global history of fascist imperialism, *Journal of Global History*, 12, 2017)。

2. 研究の目的

本研究は、戦間期東欧の権威主義をどのように後進性・逸脱という議論ではなく、20世紀史としての同時代性(新しさ)の中で理解・記述することができるのかを問題とする。戦間期東欧諸国の権威主義体制を、単なる西欧的自由主義の未発達というとらえ方ではなく、同時代西洋世界に共通する問題に直面する社会という観点からとらえ直すという学術的要請に応えようとするものである。また、戦間期東欧権威主義に関して、ファシズムとの関係についてもその基盤の未発達が指摘され、いわばある種の「後進性」としての「ファシズムの未達成」という、単線的発展論的な説明がなされてきたが、これについても再検討する必要がある。そこで本研究は、権

威主義的・右翼急進主義的政治を、そのファシズムとの関係に着目することにより、単なる「保守反動」という「古さ」ではなく、同時代的な課題に取り組む「新しさ」においてとらえるという、新たな戦間期東欧史像を目的とする。また、かつてファシズム諸国とりわけナチ・ドイツの特徴とされてきた、政治と体制におけるナショナリズム・人種主義・反ユダヤ主義の先鋭化・突出に関しても、近年 20 世紀欧米先進諸国における比較の文脈のなかに置き直されているところではあるが、東欧諸国の権威主義政治の文脈における検討が課題となっている。これもまた、東欧権威主義政治の「新しさ」を明らかにする主題として、本研究において取り組む。

なお、ファシズム研究に関しては、既存の研究に対して以下のような知見を加えることを目的とする。独伊以外のファシズムを研究する際の最新の研究潮流である、グローバルファシズム論に対して、政治戦術の相互参照という視点は継承しつつも、各国権威主義政権・政治家・政治団体等が単に他国のファシズムを模倣したとはとらえず、彼らなりの社会問題や自国の置かれた状況に対する応答の一部ととらえることにより、ある種の「主体性」を織り込んで分析する視点を加える。そのために本研究が主に扱うのは、ナチ党・ファシスト党の模倣や傀儡の政党・政権ではなく、ファシズムと類似の概念装置や政治戦術を持つものの、従来のファシズムの定義からみると、その周縁か境界線上にあるような体制・政党・団体である。このようなファシズムの周縁への着目によって、東欧におけるファシズムの研究を通じ、「定義」と「分類」による比較ファシズム論とは別のファシズム理解の視角を提示することにつながる。このようなファシズムの周縁への着目は、東欧権威主義諸国においては、在地社会の諸問題の解決をもっとも強く要求されたアクターへの着目と同義であるため、本研究はこの視角によってより主体的で切実な問題意識のなかでファシズムとの関係を選択する過程を分析する。

3. 研究の方法

上記目的のため本研究は、戦間期東欧の権威主義体制がどのような課題に直面し、それをどのようにとらえ、解決しようとしていたかを検討する。東欧各国も当然のことながら、社会問題、経済不況、共産主義の脅威、国民国家の安定やマイノリティ問題など、いずれも同地域における現代的（20 世紀的）な諸問題への対応をせまられ、それを模索していた。この観点からは遅れた社会の姿ではなく、同時代性のなかで東欧各国を考えることになる。

その一つの方法は、M. マゾワのいう「人種福祉国家」の側面に着目することである。この視点においては、ワイマール・ナチ両期ドイツをはじめとする戦間期欧米先進諸国において社会問題に対応する最新の学術（医学および社会工学）的・政治的な知であった「人種衛生」の発想が、東欧権威主義国家においてどのような意味を持ったのか、それは国民と国民国家の「健全な」存続という第一次世界大戦以後の新たなナショナリズムの目的とどのような関係を持ち、戦間期欧米諸国の社会を構成する一部となったのか、ということを通して上記目的に接近することになる。この主題には、主にハンガリー社会におけるナショナリズム・人種主義・ジェンダーの相互のかかわりを示す事例から取り組む。

上記研究目的に接近するもう一つの方法が、東欧のファシズムの問題の検討である。本研究は、ファシズムを、各国の社会や体制がどのような課題に直面し、それをどう考え、解決しようとしていたかという点と関連づけて検討する。第 1 に、戦間期東欧各国にとって、政治的不安定要因であり、上述「諸問題」と並ぶ解決・対応すべき問題のひとつとしてのファシズムという視点に着目する。また第 2 に、それと同時に、すべての国のすべての勢力にとってではないが、ファシズムはそれら諸問題に対する有力な解決策やそのヒントとしても出現したのであり、この点にも同時に着目することになる。この一見相反する 2 つのファシズムとの関係はいずれも、東欧権威主義各国それぞれの「新しさ」の在り方を示すはずである。このため本研究は、ナチ党・ファシスト党の模倣や傀儡の政党・政権ではなく、ファシズムと類似の概念装置や政治戦術を持つものの、従来のファシズムの定義からみると、その周辺か境界線上にあるような体制・政党・団体等を扱う。これらは各国社会の抱える諸問題と格闘するなかでファシズムとの複雑な関係を築いていたからである。このようなファシズムの周辺へ着目することにより、東欧権威主義諸国において在地社会の諸問題の解決をもっとも強く要求されたアクターへ着目でき、より主体的で切実な問題意識のなかでファシズムとの関係を選択する過程を分析することにつながる。とはいえ、かれらが取り組んだ「諸問題」の構成と内実、これら 3 者間やファシズムとの関係の在り様にはバリエーションがあるはずである。本研究はこれを踏まえて進められる必要がある。

最後に、ナショナリズムと人種主義の問題とも、ファシズムやそれに類似する国家体制の問題ともかかわるのが、それらの運動や体制のもとで発現した暴力の問題である。戦間期権威主義政治を現在においていかに考えうるかことは、そこにおける暴力をどのように扱い、また暴力がどのように記憶・説明されているかということと深くかかわっているため、本研究プロジェクトにおいては萌芽的・限定的とならざるを得ないが、できる限り扱っていく。

4. 研究成果

本研究においては、戦間期東欧の権威主義政治の問題、特にそこにおける「東欧のファシズム」という問題を、ネイション（国民/民族）と人種主義の問題、国家（とその体制の選択肢）の問題、

暴力(とその解釈や記憶)の問題という 3 つの視点から取り組むことにより、従来のファシズム研究が多少とも前提にしていた「標準的なファシズムとそのヴァリエーションやそこからの逸脱」という前提とは別の理解の可能性を追求した。

ファシズム体制国家に隣接する「小国」諸国における、対外関係と国内体制の関係をめぐる同時代の論点と「選択肢」がどのようなものだったか、なかでもユーゴスラヴィアにおける対イタリア関係とリトアニアにおける対ドイツ・対ソ連関係が、体制の維持や変化の選択をめぐると戦術や議論とどのような関係にあったかを、政治勢力や政治家集団を軸に解明した。この観点からは、東欧諸国におけるファシズム運動について、国際環境やナチによる支配といった外部からの要因、またファシズムの単なる伝播・模倣というモデルによってどこまで理解可能であり、どこから各国内の運動の主体的な契機の見点から検討をすすめるなければならないかを明らかにし、その具体的な内実を解明した(国家の問題)。

このうちリトアニアに関しては、権威主義政府による外交的中立の模索期、およびソ連支配期の両時期において、対ナチ・ドイツ同盟構築を目指した勢力が、ナチ的な国家体制の選択的・主体的な受容や国内諸勢力間関係のなかでの選択肢としての対ナチ連携といった側面が検討の中心となった。この検討の中で、対ナチ連携の模索やユダヤ人排除が、国際情勢や独立の喪失によってはじめて出現したものではなく、リトアニア社会に存在していた複数の契機がこのときに増幅されたものとして理解されるべきことなどが明らかになった。リトアニアにおけるホロコーストについても同様であり、1940年のソ連編入をきっかけにユダヤ人に対する反感が起きたといった説明がなされるが、それ以前の反ユダヤ主義とのつながりを無視できないことを明らかにした(暴力の問題)。

またクロアチアに関しては、ウスタシャ運動がその開始時においてグローバルファシズム、すなわちファシズムの国際的波及の一環として理解できるものだったものの、1930年代後半以降のクロアチア民族勢力とファシズム・イデオロギーの核たる「政治暴力」との接点の構築については、カトリック教会司祭と農民党の武装化という内的契機を抜きにしては理解できないことを明らかにした。さらに、ナショナリズムや保守派の「ファッショ化」について、ウスタシャを含めた当事者の独伊の「ファシズム」への警戒心、その歩み寄りのプロセスや「距離」などを視野に入れ、戦間期ユーゴに複数あった急進化の文脈を捉える必要性を明らかにした。同時にセルビアのファシズム運動に関しては、王党派の運動および国家体制の選択肢としての君主制との関連にも着目した。このなかで、セルビアの右翼急進主義・王党派・ファシズムといった諸派の関係および民族問題・国家体制問題・社会問題といった諸問題相互の関係、またこれらの関係間の関係といった、従来の比較ファシズム研究や権威主義政治研究にはなかった視点を提示することができた(国家の問題/暴力の問題)。

さらに、以上の問題意識と成果を踏まえた場合、「リトアニア史」像、「バルト史」像や「戦間期ユーゴスラヴィア史」像がいかに新たなものとして可能になるか、どのような論点の中で新たな歴史研究が求められ、また可能なのか、さらに、ファシズム・権威主義とそこにおける暴力の歴史が現在におけるどのような政治資源としての歴史像として機能しているのか(現在の政治状況のなかで現代史の歴史・記憶がどのように機能し、その問題点はどのように考えられるか)という点についても、事典項目や翻訳解説等のかたちで成果を発表した。

ナショナリズムと人種主義問題に関しては、第1に、戦間期権威主義の前提となる近代ナショナリズムの展開における諸問題について、19世紀ハンガリーの事例から再検討をすすめた。第2に、ハンガリーにおける福祉政策と人種主義政治、さらに女性の地位をめぐると政治の形成する分ちがたい相互連関構造の様相を明らかにし、戦間期における再分配をめぐると政治と排除・序列化の政治の関係におけるいくつかの論点を示した。これらによって、「東欧的なファシズム」の歴史学的問題を再検討する前提となる、「東欧的なナショナリズム」の問題を、ナショナリズムの歴史的研究全般の問題に位置づけながら整理した(ネーションと人種主義の問題)。また、戦間期東欧の政治暴力、特にホロコーストの過去の記憶をめぐると諸問題に関して整理した(暴力の問題)。

上記研究成果は、「主な発表論文等」に示すもののほか、以下の論文・論考・口頭発表を通じて公表された。

(論文・論考)

Hisashi Shigematsu, [Book Review] Jonathan Leader Maynard, Ideology and Mass Killing: The Radicalized Security Politics of Genocides and Deadly Atrocities, *International Relations of the Asia-Pacific*, 24(1), 2024, pp. 171-174

重松尚「変動するリトアニア—既存の価値体系を批判的に見ることの強さとは」『図書新聞』第3621号、2023年、4頁

姉川雄大「ナショナリズム研究の課題と「身体」の国民化」2023年『九州歴史科学』第51号、2023年、113-128頁

(口頭発表)

重松尚 リトアニアのユダヤ人に関する歴史叙述の変遷 日本ユダヤ学会 2023 年度シンポジウム 2023 年

門間卓也 王朝原理と「ファシズム」の交差 ユーゴスラヴィア王国における「セルビア人問題」の一局面 東欧史研究会 2023 年度大会 2023 年

姉川雄大 東欧近現代史におけるナショナリズム 戦間期ハンガリー史における「国民化できない/されないこと」 九州歴史科学研究会 2023 年 7 月例会 2023 年

姉川雄大 第一次世界大戦後ハンガリーの人種主義とジェンダー 歴史学研究会大会近代史部会 2024 年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 門間卓也	4. 巻 45
2. 論文標題 東欧から「グローバル・ファシズム」を再考する：戦間期ウスタシャ運動の政治暴力とプロパガンダ	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 東欧史研究	6. 最初と最後の頁 26～44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 重松尚	4. 巻 67
2. 論文標題 ホロコーストの原因の追究と責任の追及：『同胞』の出版に寄せて	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ユーラシア研究	6. 最初と最後の頁 52～55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 重松尚	4. 巻 36
2. 論文標題 〔書評〕菅野賢治著『「命のヴィザ」言説の虚構：リトアニアのユダヤ難民に何があったのか？』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユダヤ・イスラエル研究	6. 最初と最後の頁 81～83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 東欧の「ファシズム」：両大戦間期・第二次大戦期のリトアニア人ナショナリズム運動の事例から
3. 学会等名 東京大学GSIキャラバンプロジェクト「小国」の経験から普遍を問い直す」研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 姉川雄大
2. 発表標題 「ハンガリー史」とホロコーストの記憶
3. 学会等名 東欧史研究会2023年1月例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 リトアニアにおける対ナチ協力の階層性
3. 学会等名 グレーゾーン研究会公開オンライン・ワークショップ
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 重松尚
2. 発表標題 第二次世界大戦開戦前後のリトアニアの外交政策をめぐる議論
3. 学会等名 日本国際政治学会2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 門間卓也
2. 発表標題 「グローバル・ファシズム」と現実政治 戦間期ユーゴスラヴィアにおける権威主義体制の分析
3. 学会等名 日本国際政治学会2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 姉川雄大
2. 発表標題 戦間期ハンガリー権威主義政治における「ヌメルス・クラウズス」体制としての側面 の解明に向けて
3. 学会等名 日本国際政治学会2021年度研究大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 重松尚他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 536
3. 書名 グレーゾーンと帝国：歴史修正主義を乗り越える生の営み	

1. 著者名 姉川雄大他	4. 発行年 2023年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 792
3. 書名 ハプスブルク事典	

1. 著者名 ルータ・ヴァナガイテ、エフライム・ズロフ、重松尚訳	4. 発行年 2022年
2. 出版社 東洋書店新社	5. 総ページ数 200
3. 書名 同胞：リトアニアのホロコースト 伏せられた歴史	

1. 著者名 中欧・東欧文化事典編集委員会（編）、門間卓也、重松尚、姉川雄大、他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善	5. 総ページ数 200
3. 書名 中欧・東欧文化事典	

1. 著者名 鍋谷郁太郎編、姉川雄大他	4. 発行年 2022年
2. 出版社 錦正社	5. 総ページ数 200
3. 書名 第一次世界大戦と民間人：「武器を持たない兵士」の出現と戦後社会への影響	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	重松 尚 (Shigematsu Hisashi) (90850917)	東京大学・大学院総合文化研究科・助教 (12601)	
研究分担者	門間 卓也 (Monma Takuya) (90868291)	関西学院大学・文学部・研究員 (34504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------